「日々の理科」（第 2534 号） 2021,-6,21

「アゲハの前蛹（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

教室でアゲハの幼虫を飼育していると、さまざまな「事件」が発生する。一番多いのは、夜間や早朝に羽化した成虫が、教室の壁にとまっていて驚いたり、時には授業中に教室をヒラヒラ飛んだりすることだ。教科書のようにちゃんと網のある入れ物で飼えば良いのだが、私は毎年「オープン」で飼育している。そのほうが昆虫と子どもの距離が、より近いからだ。

ある朝のこと。「先生、先生、幼虫っぽい、サナギっぽいのが、電気の線らへんにとまってます！」案内されて隣の教室に見に行くと、確かにその通りの状況で、延長コードの縁に幼虫っぽいサナギがいた。

これは「前蛹」（ぜんよう）という状態の、「幼虫最後の姿」である。前日に逃亡して、行方不明になっていた幼虫が前蛹化したにちがいない。

アゲハの場合、前蛹の状態でいるのは２４時間程度の短い時間である。翌朝にはサナギになっていた。

アゲハの終齢幼虫は、前蛹になる前に葉を食べるのを止めて、サナギになるのに適した場所を探す。虫かごの場合、葉や茎からは離れて、壁を登ることが多い。

この幼虫は虫カゴの壁を登り、翌朝に蓋の裏側で前蛹化していた。完全に逆さまになって静止している。よく見ると、周囲には糸がたくさん見える。私はこの珍しい幼虫を、学年の子ども全員に見せることにした。